日本体育大学紀要（Bull. of Nippon Sport Sci. Univ.），52，1009–1017，2023

【原著論文】

4年制保育学生の一般職就職に至る決定要因に関する研究

―大学の授業経験と保育実習経験に着目して―

河田　聖良[1)]，齊藤多江子[2)]

[1)] 日本体育大学身体教育系

[2)] 日本体育大学教育福祉系

A study of determinants leading to employment in career outside of specialties in university of childcare training students: Focusing on the learning experience in university and childcare training experience in nursery

KAWADA Seira and SAITO Taeko

Abstract: Nowadays, childcare and childcare with a declining birthrate has become a social problem for childcare workers. In order to find a way to solve the shortage of childcare workers, research on childcare worker turnover and surveys of potential childcare workers were conducted, and the factors behind the turnover were clarified. Among them, as a means to solve the shortage of childcare workers, it was considered not only to prevent job turnover but also to increase the employment rate of childcare training students. However, among the childcare training students, little research has been done on the actual situation of students who find employment in a career outside of their specialties and the factors that determine the place of employment. In addition, there are no studies on regarding the influence of learning experience in childcare training course on employment decisions. Therefore, the purpose of this study was to clarify the background of consciousness and the factors for deciding where to work, what kind of learning experience in university and childcare training experience in nursery led childcare training students choose a career outside of their specialties. An interview survey was conducted with students who are planning to obtain a kindergarten teacher's license and a childcare worker qualification at a childcare training course and who are planning to work in a career outside their specialties. As a result, it was found that some students feel that the learning experience in university can be utilized for any employment. It was also revealed that although they felt positive about their childcare training experience in nursery, it became clear they did not choose a career of their specialties.

要旨：近年，少子化の中にあっても保育ニーズは増えており，保育者不足が大きな社会問題になっている。保育者不足を解消する手立てを模索するために，保育者の離職に関する研究や潜在保育者への調査が進められ，離職の要因は明らかにされてきた。その中で，保育者不足を解消するための手立てには離職を防ぐほかに，保育者養成校の学生の保育職への就職率を上げることが考えられる。しかし，保育者養成校を卒業する学生の中で，保育職に就職をせず一般職に就職する学生の実態や就職先決定要因についてはほとんど研究がなされてこなかった。また，保育者養成校の授業での経験が就職先決定に及ぼす影響についての研究も見当たらない。そこで本研究は，4年制保育者養成校に在籍する保育学生が，授業や実習での経験をどのように捉えて，一般職への就職を決定するのか，その意識の背景や就職先決定の要因を明らかにすることを目的とした。対象は，保育者養成校で幼稚園教諭免許状および保育士資格を取得予定の卒業予定者で，一般職に就職予定の学生へインタビュー調査を実施した。結果，一般職への就職を決めた学生の中には，授業を経験することによってやりたいことが明確となり，保育職以外の分野へ興味を深めることになった学生もいることが分かった。また，実習経験については，経験をポジティブに捉えていたにもかかわらず，保育職への就職に至っていないことも明らかになった。

(Received: April 5, 2022 Accepted: August 1, 2022)

Key words: Childcare training course, Employment of childcare training students, Childcare training experience in nursery, Learning experience in university

キーワード：保育者養成，保育学生の就職，実習経験，授業経験

1. 研究目的

近年，少子化の中にあっても保育ニーズは増えており，保育者不足が大きな社会問題になっている。このような中で，保育者不足を解消する手立てを模索するために，保育者の離職に関する研究や潜在保育者への調査が進められ，離職の要因が明らかにされてきた。その中でも早期離職については，保育者養成校の卒業生を対象とした調査や保育現場への調査が実施されている。保育者養成校の卒業生を対象とした調査から，新卒後2年以内に離職する者は2割程度いることが明らかになっている（全国保育士養成協議会，2009，上田・松本，2015）。保育現場への調査からは，在籍3年未満の離職者がいる保育所や認定こども園は8割以上におよぶことが分かっている（木曽，2020）。また，保育者の離職原因としては，職場の人間関係（森本ほか，2013，遠藤ほか，2012，庭野，2018），賃金の低さや仕事量の多さ等の待遇の悪さ（東京都福祉保健局，2019）が大きな要因であることが明らかになっている。

離職を防ぐほかに，保育者不足を解消するための手立てには，保育者養成校の学生の保育職への就職率を上げることが考えられる。しかし，保育者養成校を卒業する学生の中で，保育職に就職をせず一般職に就職する学生の実態や就職先決定要因についてはほとんど研究がなされてこなかった。その理由はおそらく，長い間保育者養成校は短期大学や専門学校の2年制が主流で，2年制保育者養成校を卒業した学生で保育職に就職しない学生は例外的な存在として扱われてきたことが関係していると考えられる[注1)]。しかしながら，近年，4年制保育者養成校の割合が増加し，保育者養成校に入学する学生のうち4年制の学生は4割（文部科学省，2019）にのぼっており，今後も4年制を卒業する保育学生の割合は高くなることが予想される。また，令和元年度の報告では，保育者養成校に在籍する学生の中で，保育士資格もしくは幼稚園教諭免許を取得するにも関わらず，保育職に就職しない学生は短期大学・専門学校では1割に満たないが，4年制では2割以上存在することが指摘されている（全国保育士養成協議会，2019）。

一般職に就職する保育学生の基礎データが蓄積されていない中で，保育職を選ばないのは，賃金の低さや仕事量の多さ等の待遇の悪さがその大きな要因として長年推測されてきた。このような中で，令和元年に実施された保育学生を対象とした調査（全国保育士養成協議会，2019）において，初めて全国レベルで一般職就職決定理由についての検討がなされた。その結果，一般職に就職を目指すことに決めた学生の4割程度が「実習で自信がもてなかった」，2割程度が「実習が辛かった」，「授業を通して保育は想像していた仕事とは違ったから」と回答していた。また，同研究における卒業前の学生へのインタビュー調査では，実習経験において，〈保育内容・方法への疑問〉，〈人間関係の悪さ〉，〈否定的な指導〉を受けたと感じたことで，〈保育現場に失望〉し，〈保育職への迷い〉が生じていることが明らかになっている。これらの結果から，一般職就職を目指すことにした背景には，実習での経験や保育者養成校での学びが影響を与えていることが示唆される。

しかし，このインタビューにおいては，一般職就職への授業[注2)]の影響については質問しておらず，想像していた保育のイメージとどのような点にズレを感じていたのか等，具体的にどのような経験をしたのかまでは明らかになっていない。また，他の研究においても，保育者養成校の授業での経験が就職先決定に及ぼす影響についての研究も見当たらない。

このような研究動向を踏まえ，本研究では，4年制保育者養成校に在籍する保育学生が，授業や実習[注3)]での経験をどのように捉えて，一般職[注4)]への就職を決定するのか，その意識の背景や就職先決定の要因を明らかにすることを目的とする。実習経験による一般職就職への影響については，先行研究でも検討されている。しかし，実習経験は，保育者としての意欲を高めるなどの肯定的な側面がある一方で（谷川，2013），保育者としての意欲に否定的に作用する側面も確かめられており（谷川，2010），実習でどのような経験をしているのかに着目する必要があると指摘されている（神谷，2009）。また，保育所実習後に，就職先の選択として保育所を選ばない学生が増えるという指摘もある（坪井，2017）。このようなことから，実習経験が一般職への職業選択に影響を与えている可能性が高いと考え，実習経験の影響についても検討することにした。

2. 研究方法

2.1 調査対象者

保育者養成校で幼稚園教諭免許状および保育士資格を取得予定の卒業予定者を対象とし，インタビュー調査を実施した。調査対象は，調査時において，一般職への就職を予定している5名（全員女性・22歳・4年制大学）である。

2.2 調査時期

調査時期は，卒業前の202×年1月である。

2.3 調査方法と手続き

インタビューは，大学入学から就職先決定までのプ

ロセスや経緯を，実習や授業での経験や出来事に着目しながら対象者の語りに内容に応じて行う，半構造化インタビューの手法を採用した。①大学の授業での経験や就職への影響，②一般職に就職することに決めた時期や理由，③実習での経験や就職への影響，という3つを軸に質問を行った。

2.4　分析の手続き

大学の授業や実習での経験や出来事という過去の経験に着目し，それを構造的に検討するために，本研究では，KJ法を発展させた「うえの式質的分析法」（上野，2018）を参考にした。「うえの式質的分析法」は情報の影響関係を構造的に検討できる分析法であり，就職先決定までの授業や実習等過去の経験の影響を検討する本研究には適していると考えた。

分析の手続きは以下のようになる。①録音したインタビュー内容を逐語録化し，内容を意味のまとまりごとに切片化した。②語られた内容を解釈し，要約したものに，その内容を端的に表すカテゴリーを生成した。③大学入学から就職先決定までのプロセスを，授業や実習等の経験との関係に着目しながら，個別の図を作成し，個人の特徴をまとめた。④5名分の個別図から，共通項を見出し，カテゴリー間の関係を検討したうえで，ストーリーラインを作成して図に表した。⑥最後に，共通する経験とその人特有の経験を表にまとめた「マトリックス分析（上野，2018）」を行った。なお，分析は本稿2名の執筆者で行い，一致しない結果については協議のうえ決定することで，客観性・妥当性の確保に努めた。

2.5　倫理的配慮

本研究は，日本体育大学倫理審査委員会の承認（承認番号：第021-H075）を得て行った。

インタビュー開始前に，研究の目的と意義，研究方法，研究への参加協力の自由意志と拒否権，研究結果の公表方法，研究に関する質問，意見の連絡方法について依頼書に基づき口頭で説明を行い，書面にて同意を得た。

3. 結　　果

本研究の目的は，4年制保育者養成校に在籍する保育学生が，授業や実習でどのような経験や出来事を経て，一般職への就職を決定するのか，その意識の背景や就職先決定の要因を明らかにすることであった。一般職への就職予定者を対象にしたインタビュー調査から得られた語りをもとに，それぞれに進路選択のストーリーラインを作成し，分析を行った。

3.1　大学入学から就職先決定までの個々のプロセス

インタビュー調査を分析した結果を，個別で以下に示す。尚，実線の矢印は，インタビューの語りから対象者が実際に受けた影響を示しており，点線の矢印は，語りをもとに推察される影響を示している。

3.1.1　学生①の語り（図1）

在学大学には，幼稚園時代の〈保育者への憧れ〉から進学している。

大学の授業では，子どもに関する分野も含め幅広く知ることができた〈一般教養を身につけられた〉と感じている。また，「対象は違うけど，人への接し方とか勉強になった。相手の気持ちを考えるとか，間接的には同じところがいっぱいあるし。人と関わることの勉強ができたので使えるかなと。」と語っており，〈学んだ内容がやりたいことに活きる〉とも感じているようだ。

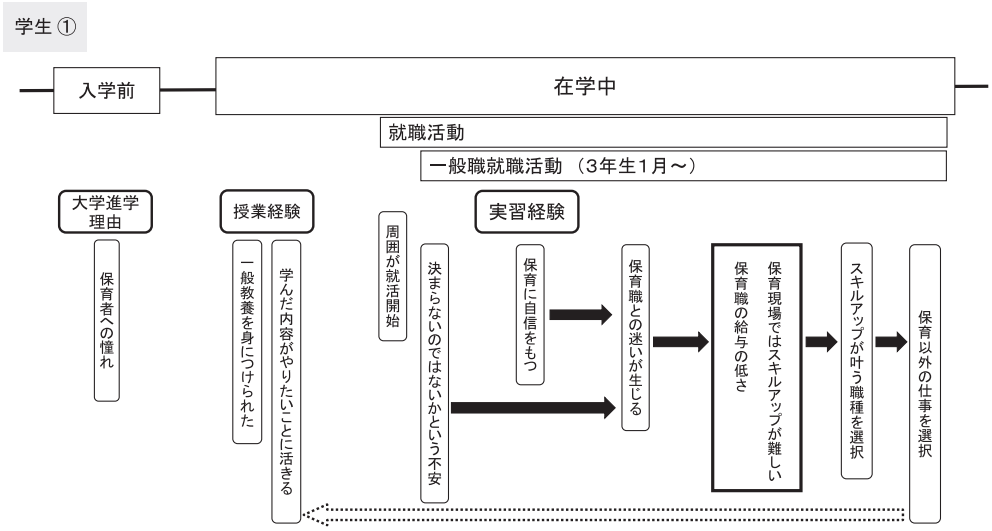

図1　学生①の大学入学から就職決定までのプロセス

一般企業に興味があったことから〈周囲が就活開始〉する3年生の1月頃から就職活動を始めている。しかし,「やり始めたら大変で。本当にとってもらえるのかなと思って。」と語っており，途中で〈決まらないのではないかという不安〉をもったことが分かる。

そのような中，4年生の6月に幼稚園での実習が始まった。「先生に向いているなと思って。」と語っており，実習が〈保育に自信をもつ〉と共に,〈保育職との迷いが生じる〉経験になった。

しかし,〈保育職の給与の低さ〉と,〈保育現場でのスキルアップが難しい〉ことを実習において感じたことで,〈スキルアップが叶う職種を選択〉したいと考え，最終的に〈保育以外の仕事を選択〉につながっている。

3.1.2　学生②の語り（図2）

在学大学には,〈子どもが好き〉だったことから〈保育者になりたい〉と思い，進学した。

実習経験においては,〈保育の楽しさを実感〉しつつも,「1年間同じクラスをもつというのが無理だなと思った」と語っており,〈保育者は不向きと実感〉する機会にもなったようだ。この経験が,〈周囲が就活開始〉したことによって自分も就職活動を意識し始めた際に,〈保育者ではない〉と思うに至る背景になっている。

一方で，大学では身体の仕組みに関わる授業と障害児保育に興味をもったことで,「将来はスポーツ施設で障害のある子向けのレッスンができるようになればいいな」と考えるようになった。また,「本当に保育者なのか，スポーツの道に行きたいのかを勉強しているうちに気づけた」と語っている。学ぶ中で〈やりたいことが明確に〉なっていることから，大学の授業が〈就職選択に影響〉を与え,〈保育以外の仕事を選択〉に至る背景となったことが示唆される。

また，子どものスポーツ指導のアルバイトについて,「子どもの発達段階とか学ぶことができたので。『これくらいの年齢の子はこうだな』とか思いながら働いていると，楽しいなと思って。」と語っており,〈学んだ内容がやりたいことにも活きる〉経験になったことも,〈保育以外の仕事を選択〉することにつながったことが推察される。

3.1.3　学生③の語り（図3）

在学大学には,〈身内のつながり〉があり〈保育者になりたい〉と思っていたことから，進学した。

大学の授業では,「声掛けによって，子どものやる気の出し方とかかわることを勉強したので。それは子どもだけじゃなくて，人と関わる中でも，そういったことにつながったかなと思う。」と語っており,〈学んだ内容がやりたいことに活きる〉ことを実感している。

就職について考え始めたのは,「先輩（4年生）の焦っているのを見て」と部活動の先輩が就活に焦る姿を見て,〈周囲が就活開始〉する3年生の夏季から就職活動について考え始めているが，一般職に就こうと決めたのは4年生の6月頃で実習経験後である。

実習経験においては,〈保育の楽しさを実感〉しており,「実習先の幼稚園が声をかけてくださって，そのときには『うわ～』と思いました。」と,〈保育職との迷いが生じる〉ような出来事があったことを語っている。しかしながら，大学の部活動に携わる中で「マネージャーの楽しさを続けたいという気持ちが出てきて」と語り，その後，より〈他分野への興味〉が高まっている。

徐々に〈保育以外の仕事を選択〉する気持ちは高

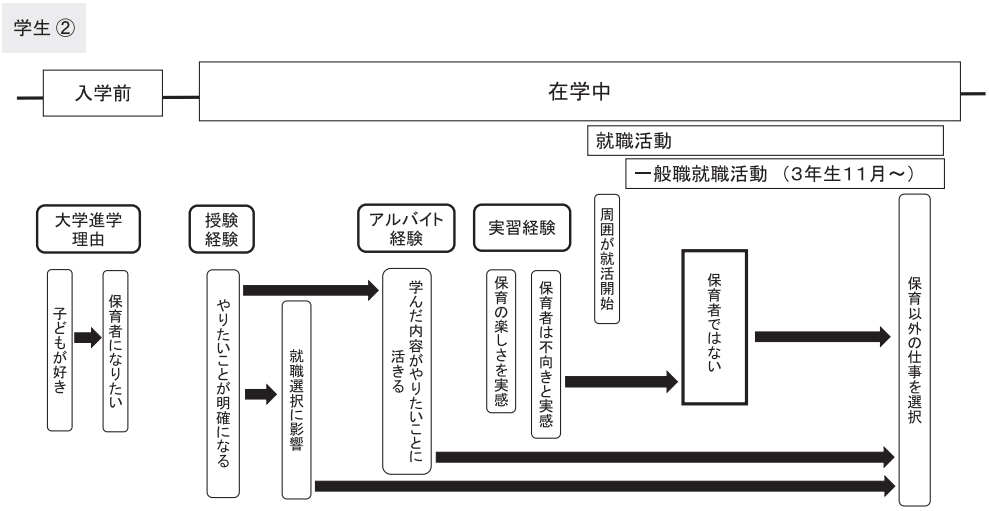

図2　学生②の大学入学から就職決定までのプロセス

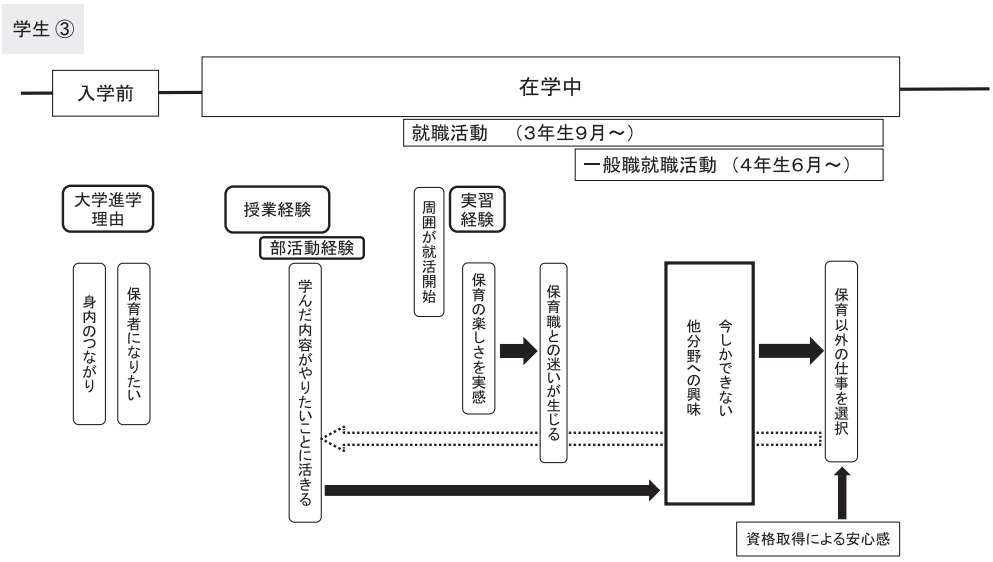

図3　学生③の大学入学から就職決定までのプロセス

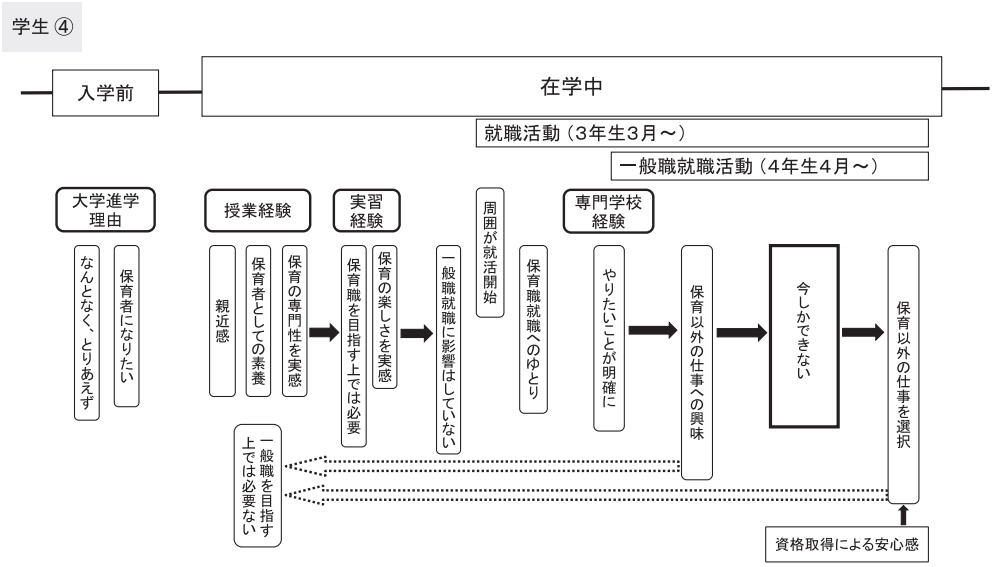

図4　学生④の大学入学から就職決定までのプロセス

まってはいくが，「ずーっと続けるわけでないのかなと思って，一般企業にいった時に。」と，一般職に長く勤務し続けることはないだろうことを感じている。そのため，「資格とかとっておけば，いずれ」「そのあとにでも保育職に就けるかな，と思ったので。」と，〈資格取得による安心感〉を背景に一般職に就いた先の再就職についても考えている。その上で，「先に若い時にできるように，まずは一般企業に決めました。」と，若年層での〈今しかできない〉活動が優先となり，一般職就職に至る動機となっていることが示唆される。

3.1.4　学生④の語り（図4）

在学大学には，〈なんとなく，とりあえず〉という気持ちはあったが，〈保育者になりたい〉と思っていたこともあり，進学した。

大学の授業の雰囲気に〈親近感〉を覚えながら，保育職に就くために〈保育職を目指す上では必要〉な保育に関わる様々な内容を繰り返し学ぶことで〈保育者としての素養〉を身につけることができた。「見たりとか，講義もあったけど，演習とかもいっぱいあった。」と語っており，実践的な授業を受けることで〈保育の専門性を実感〉している。

3年生の終わりころから〈周囲が就活開始〉するが，「保育だったら今じゃなくてもいいじゃないですか，全然。もうちょっと遅くても，4年生からで。」と語っており，保育職に就くことを目指していたことからも「幼稚園だったら実習園に行きたいかなぁと思っていたんですよ。だから，なんか別に焦ることもなさそう

と思って，実習とかにもまた行くしなぁと思いながらも，保育園の路も考え始めたのが3月とかですかね。」と，就職については〈保育職就職へのゆとり〉をもって考えていたようだ。

これまでもっていた憧れや嗜好から4年生の4月にネイルスクールに通い始め，そのことで〈やりたいことが明確に〉なり，〈保育以外の仕事への興味〉が高まり，大学の授業を〈一般職を目指す上では必要ない〉と感じはじめる。「どっちもできるっちゃできるじゃないですか，保育もネイルも，今でもできるし，おばあちゃんになってもできる。両方経験することもできるけど，どっちを若い時にやりたいかっていったら，ネイリストさんだなと思ったので。」と語っていることからも，保育職に就くことを目指して取得しようと思っていた資格ではあるが，〈資格取得による安心感〉を持ちつつ，若年層での〈今しかできない〉という思いが〈保育以外の仕事を選択〉につながっている。

実習経験が直接的に〈一般職就職に影響はしていない〉ようであり，「実習は楽しかったです。どの実習も実習先に恵まれたなぁと思いました。」や，「実習はプラスでした。いろいろ知れて。」と語っていることからも，〈保育の楽しさを実感〉し，実習で得られた経験は非常に有益で〈保育を目指す上では必要〉であったことが推察される。

3.1.5　学生⑤の語り（図5）

在学大学には，子どもが好きで〈子どもと関わりたい〉思いから〈保育者になりたい〉という願いを持ち，進学した。

大学の授業は，「模擬授業とかやったのは（よい）経験になったかな。」，「将来，保育士にならなくても，自分が子育てするときとかに役立つこととかはいっぱい知れたので。」と語っており，将来，保育職に就くことがなくとも自身の〈子育てに活きる〉ことを実感している。

実習経験では，「保育士みたいなことをやってみると，楽しいのもあるんですけど，大変さもあって，自分自身が保育士とかに『向いてないんじゃないか』って思ったりしたこともいっぱいあったので。」と語っており，〈保育者は不向きと実感〉するような体験をしている。また，実習を通して保育者としての楽しさも感じているが〈子どもとの意思疎通に戸惑う〉ことや，〈子どもとの関わりに違和感〉を覚え，複数人の子どもと関わるような一斉活動等の場面を体験したことで〈保育実習が就職に影響〉している。

就職については，保育職か一般職かを悩んでいたが，実習経験で「子どもと大人の違いがあるとは思うんですけど。大人の方がやっぱり伝わりやすいというか。」と語っており，アルバイト先のスポーツジムでの体験が〈保育職以外の就活〉を考えることに影響していることが推察される。

また，大学の授業よりも〈保育以外の分野の影響〉が大きく，アルバイトを経験する中で〈やりたいことが明確に〉なり，〈他分野への興味〉が高まるとともに〈保育以外の仕事を選択〉をもつに至ったことが推察される。

3.2　一般職決定までのプロセスと個々に経験した内容

5名分の個別図から，共通項を見出し，カテゴリー間の関係を検討したうえで，ストーリーラインを作成した（図6）。また，個々に経験した内容が，他の対象者と共通する経験なのか，その人特有の経験なのか分かりやすくするために表1にまとめた。尚，実線の矢印は，語りから読み取れる実際に受けた影響とその過

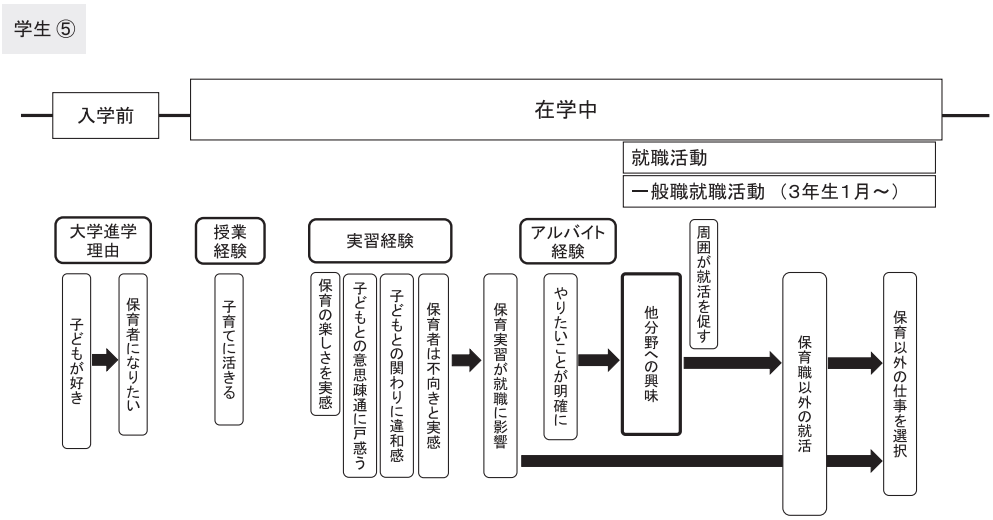

図5　学生⑤の大学入学から就職決定までのプロセス

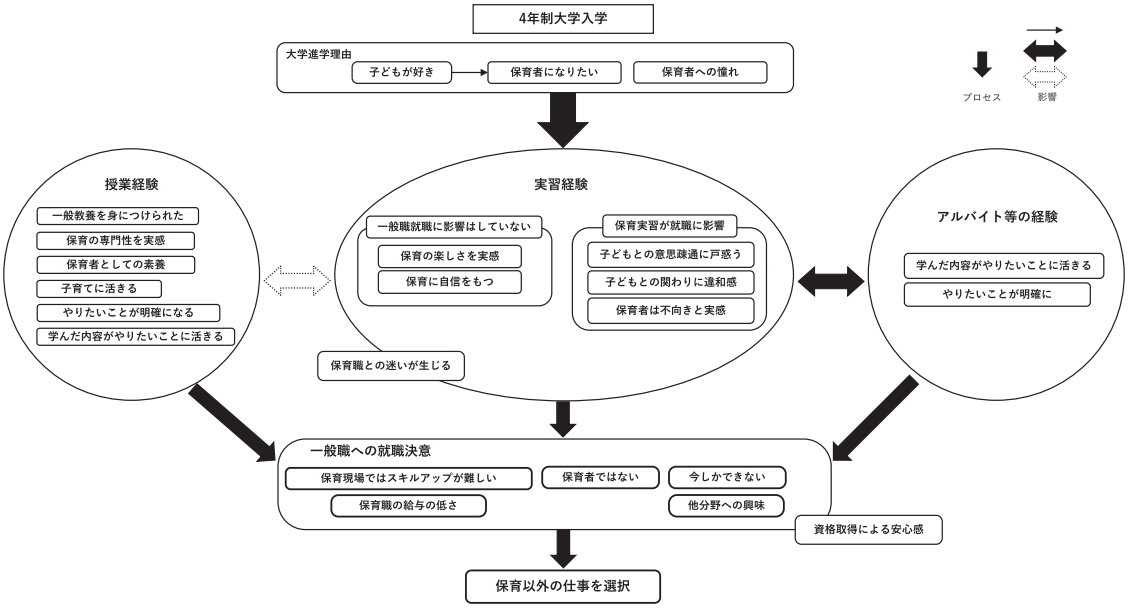

図6　一般職への就職意思のある学生の一般職決定までのプロセス

程を示しており，点線の矢印は，語りをもとに推察される影響を示している。

4. 考　　察

一般職への就職を選択した学生は，大学進学における理由として，「保育者になりたい」（5名中4名・表1）という思いをもって入学していることから，少なくとも入学時は保育職に就きたいと考えていたことが推察される。全国保育士養成協議会（2019）の調査では，「8割以上の学生が保育職を志して，指定保育士養成施設に入学している」ことが報告されており，本研究の対象者においても同様の結果であったことがわかる。

大学の授業経験では，「保育者としての素養」や「専門性」について言及している学生（学生④），自分の「子育てに活きる」と感じている学生（学生⑤）がおり，保育者の専門性や役割について学ぶことができたと感じていると思われる。他方，自身の「やりたいことが明確」となっていった学生（学生②）もおり，授業経験が保育職以外「他分野」への興味を深める好機となり，一般職を選択することにつながっていった学生がいることが推察された。さらに，大学で学んだ授業内容を振り返ってみると，子どもについて学ぶことが大人（人）との関わり方にも活かせる「学んだ内容が活きる」ことに気づき，一般職として働くうえでも有効であると考えている学生（学生①，学生③）もいる。

実習経験では，5名中4名の学生（表1）が「保育の楽しさを実感」しており，また，「保育に自信をもつ」ことができたと感じた学生（学生①）もいる。一方で，実習が就職に影響している学生については，実習経験が「子どもとの関わりの難しさ」（学生⑤）を感じたり，「保育者は不向き」（学生②，学生⑤）だと実感する機会になっていた。このことから，「保育の楽しさ」を感じているにもかかわらず，自身の資質・気質等への受けとめ方が要因となって，一般職を選択するに至る学生が存在することがわかる。

全国保育士養成協議会の報告書（2019）では，一般職に就職を目指すことに決めた理由について「実習で保育をすることに自信をもつことができなかったから」が，4割程度で最も多かったことが報告されている。しかし本研究では，5名中4名の学生（表1）が実習で「保育の楽しさを実感」しており，実習での経験は一般職を選択する過程においてネガティブに影響していたのではないことが示唆される。一方，同上の報

表1　個々に経験した内容

	大学進学理由			授業経験						実習経験					アルバイト等の経験	
対象者	子どもが好き	保育者になりたい	保育者への憧れ	一般教養	保育者			やりたいこと		保育の楽しさを実感	保育に自信をもつ	保育者は不向き	子どもとの関わりの難しさ		やりたいこと	
					素養	専門性	子育てに活きる	明確に	学んだ内容が活きる				違和感	意思疎通に戸惑う	明確に	学んだ内容が活きる
①			○	○					○		○					
②	○	○						○		○		○				○
③		○							○	○						○
④		○			○	○				○					○	
⑤	○	○					○		○	○		○	○	○	○	

告書と同様に，保育者として必要な資質等を考えると自分には向いていないと判断し，一般職を選択した学生（学生②，学生⑤）もいる。保育の楽しさを感じながらも，実習が，幼稚園や保育所という集団生活の場において，クラス担任として1年間継続して関わることで生まれる責任の重さ（学生②）や，個を尊重しつつも複数の子どもやクラス集団に対して関わる難しさ（学生⑤）を実感する機会にもなったようだ。責任の重さはやりがいに，難しさは仕事の面白さや誇りとして捉えられるように，授業と実習を往還する過程において，保育者への自信につながるような経験を保育現場とともに協働し，学生を支えていく必要がある。

アルバイト等の社会経験では，授業経験において「やりたいことが明確」となり，それがアルバイト経験につながり，さらにアルバイトの経験の中で「学んだ内容がやりたいことに活きる」ことに気づき，一般職を選択することにつながった学生もいる（学生②）。他にも，アルバイト経験で「やりたいことが明確」となり，「他分野への興味」が高まり，一般職を選択することにつながった学生もいる（学生⑤）。

また，実習での経験によって保育者として働く自信にはつながったものの，保育者の給与の低さや，スキルアップが困難であるという社会的課題から，一般職を選択した学生もいる（学生①）。希望した仕事をライフワークの1つとしたい学生にとって，「キャリアを重ねていきたい」という思いが実現できる仕事環境は魅力的であり，そこに対価が伴えば一層惹かれることに間違いはない。全国保育士養成協議会の報告書（2019）においても，一般職に就職を目指すことに決めた理由に「給与・福利厚生が充実しているから」が3割程度で高い値を示した。そこでは，ワークライフバランスについて言及されており，子育てをしながらキャリアを重ねていく保育士への支援，また，保育士として長く働きたいと考えている学生の就業継続ができるような，ライフステージに応じた支援を実現できる制度や体制を整えることが急務であることが指摘されている。

そして，実習等で保育の楽しさを実感したり，保育現場から認められたにもかかわらず，アルバイト等の経験から，そこでの面白さを感じて他分野への興味が深まり，一般職を選択するに至った者もいた。その理由に，「今しかできない」と思いがあり，今だからこそ若いうちにやっておきたいという気持ちが高まったからであった。保育士資格や幼稚園教諭免許を取得していれば，先に就いた仕事が長く続けられなくとも，保育者として再就職することができるだろうという考えが根底にあるのではないだろうか。一般職の後や子育て経験後に保育職に就く者が専門性を担保できるように，支援や研修体制を整えることが求められる（全国保育士養成協議会，2019）。

本研究の結果から，一般職への就職を決めた学生の中には，授業を経験することにより「やりたいことが明確に」なったと捉え，保育職以外の分野への興味を深めることになった学生もいることが分かる。また，実習経験については，「保育の楽しさを実感」するなど実習での経験をポジティブに捉えていたにもかかわらず，保育職への就職に至っていないことも明らかになった。全国保育士養成協議会の報告書（2019）では，保育職に専門家として働くことの意義や魅力を十分に感じていないために卒業後すぐに保育職に就く意思を持たないという場合があることが報告されている。実習での経験をポジティブに捉えているということは，実習が保育職の「意義」や「魅力」を感じる機会になっていたと推察することができる。したがって，本研究の結果からは，保育職に「意義」や「魅力」を感じていないことが一般職就職を決めた理由ではない学生もいることが示唆される。保育職に「意義」や「魅力」を感じながらも就職へと至らなかった理由として，給与や待遇面への不満（学生①），よりやりたいことを優先（学生③・④），幼稚園や保育所で働くことへの自信のなさ（学生②・⑤）があげられる。

一般職に就くことを決めた人のうち，4年制では36.1％，2年制では19.5％が給与や待遇面への不満をあげていることから（全国保育士養成協議会，2019），特に4年制の学生にとっては保育職に就職する場合に給与や待遇面が課題であると考えられる。また，2年制の保育者養成は，2年間の中で幼稚園免許と保育士資格を取得するため，授業と実習だけでも多忙な生活であることから，他にやりたいことを見いだせていく余裕や経験ができるのは4年制だからこそと言えるかもしれない。

本研究は，学生が授業や実習での経験をどのように捉えているのかについて着目して検討を進めてきた。しかし，特に，授業での経験は，学生生活を振り返る過程においてポジティブに捉えがちな学生もいる可能性が否定できない。今後は，対象者を増やしたり，卒業年度の学生だけでなく，3年生からの2年間を継続してインタビューするなど対象者の語りの過程を含めて検討する必要がある。

注

注1) 全国保育士養成協議会の報告書（2019）の調査結果によると，2年制保育士養成校を卒業する学生のうち一般職に就職する学生は3.1％である。この結果からも，2年制保育士養成校において，保育職に就職しない学生は例外的な存在として扱われてきたと推察される。

注2) 本論文における「授業」とは，大学内で実施される

「講義」,「演習」,「実技」,「実習」すべての「授業」のことをさす。

注3) 本論文における「実習」とは，幼稚園免許や保育士資格を取得するために，幼稚園や保育所など保育現場において実施されるものをさす。

注4) 本論文では，幼稚園教諭免許又は保育士資格を取得見込みの者が幼稚園，保育所，児童養護施設等の子ども（児童）が集団生活を送る場で働く仕事を「保育職」とし，それ以外の仕事を「一般職」と定義する。

文　献

遠藤知里・竹石聖子・鈴木久美子・加藤光良（2012）新卒保育者の早期離職問題に関する研究（2）：新卒後5年目までの保育者の「辞めたい理由」に着目して．常葉学園短期大学紀要，43: 155–166.

神谷哲司（2009）保育者養成系短期大学の保育者効力感の縦断的変化：実習時期と就職活動を通じた進路選択過程に着目して．キャリア教育研究，28: 9–17.

木曽陽子・春木裕美・岩本華子（2020）保育士の早期離職と離職防止の取り組みの実態：大阪府内の私立保育施設への質問紙調査より．社会問題研究，69(148): 13–31.

文部科学省（2019）学校基本調査（令和元年度）．東京

森本美佐・林　悠子・東村知子（2013）新人保育者の早期離職に関する実態調査．奈良文化女子短期大学紀要，44: 101–109.

庭野晃子（2018）新任保育士の離職意向に影響を与える要因の検討：公立・私立保育園の組織要因の比較．地域福祉サイエンス，5: 81–91.

谷川夏美（2010）保育者養成校における学生の専門職意識の変化に関する要因分析：幼稚園教育実習にともなうリアリティショックに着目して．大妻女子大学家政系研究紀要，46: 179–182.

谷川夏美（2013）新任保育者の危機と専門的成長：省察のプロセスに着目して．保育学研究，51: 105–116.

東京都福祉保健局（2019）東京都保育士実態調査報告書（令和元年5月公表）．東京都

坪井敏純（2017）キャリア形成に及ぼす保育実習体験と就職支援の課題．鹿児島女子短期大学紀要，52: 97–102.

上田厚作・松本昌治（2015）新任保育者の早期離職を防ぐために保育者養成校に求められる就職支援活動：離職率・離職原因当に関する追跡調査結果を受けて．越谷保育専門学校紀要　4: 29–34.

上野千鶴子（2018）情報生産者になる．ちくま新書：東京，p. 155–234.

全国保育士養成協議会（2009）指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査報告書Ⅰ：調査結果の概要．保育士養成資料集，50.

全国保育士養成協議会（2019）指定保育士養成施設卒業者の内定先等に関する調査研究．令和元年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（厚生労働省）報告書．厚生労働省：東京

〈連絡先〉

著者名：河田聖良

住　所：東京都世田谷区深沢7-1-1

所　属：日本体育大学身体教育系

E-mail アドレス：kawada@nittai.ac.jp